

## 日本文芸批評について

川口好美

### About Japanese Literary Criticism

KAWAGUCHI Yoshimi

#### 1. はじめに

わたしはフランスの女性哲学者シモーヌ・ヴェイユについての文章で 2016 年に文芸誌の新人賞をもらい、ものかきとして活動をはじめました。当時は北海道の上富良野町にいて、畜産の仕事をしていました。豚飼いです。デンマークの哲学者キルケゴールがどこかで「人間たちに誤解されるくらいなら、ナントカ高原の豚たちに理解されたほうがまだ、」のようなことを書いていましたが、わたしの場合それほど深遠な意味はありません。わたしは本学の文芸創作学科の OB として、大学卒業後しばらくぶらぶらしていたのですが、縁があって北海道に行くことになり、そこでたまたま見つけた仕事が養豚だっただけです。

デビュー評論で取り上げたシモーヌ・ヴェイユは一般に、特異な哲学者だと認識されています。わたしは学問としてきちんと哲学を専攻したことはありません。大学で創作を学んだ事柄についてのぼんやりした感触を明瞭なものにしたいと、卒業後のわたしは思いました。でもそのための基礎的な土台が欠けている。そう感じて、それならば一度創作を離れて、とにかく「考えること」について考えるべきなのではないかと思ったのです。それで哲学を勉強しました。語学はできませんので翻訳書の世話になったのですが、入門書の類は極力遠ざけました。わからないならわからないまま、いつかわかると信じて読み続ける、という愚かな意気込みだけ携えてたくさんノートを取りつつ読み進めたのです。近代以降のヨーロッパの哲学が中心でしたから偏りはありますが、とりあえずそのようにして「考えること」をめぐる人間の試みの歴史をたどっていきました。

その中で、どうしてシモーヌ・ヴェイユを取り上げたのか。ほとんど偶然でしたが、もともとキリスト教的思想への関心は強くありました。『聖書』の言葉を厳密に受け取りそのうえで自分流にアレンジする、ヴェイユのユニークなキリスト教理解に惹かれたのだと思います。

わたしが直接深い影響を受けた人物に、山城むつみと室井光広という二人の文芸批評家があります。お二人とも文芸創作学科の先生でした。彼らはしばしば授業で、辺境的で野蛮なキリス

ト教的発想について語っていました。山城さんの場合はロシアの作家ドストエフスキーの小説作品をとおして。室井さんには『キルケゴールとアンデルセン』という著作があります。これは、室井さんと当時北欧学科の先生だった福井信子さんとの交流から生まれた本です。わたしは二人の影響でいわゆる“正統”から外れたキリスト教思想に関心を持っていました。

修行期間として哲学に取り組んだ後、自分なりの文芸批評の歴史を書きたいという希望が大きくなりました。客観的な歴史ではなく、あくまでも自分なりの歴史でしかありません。わたしの最初の本のタイトルは『不幸と共存 魂的文芸批評』というものです。文芸批評の歴史がある“魂”の系譜として描いてみた、ということです。絶対不動の歴史ではなく、あくまでも自分自身の“魂”との共鳴という出来事を軸に、日本文芸批評についての考えをまとめたかったのです。

そこで対象として取り上げた文芸批評家は小林秀雄、中野重治、江藤淳、秋山駿などです。男性ばかりですね。みなさんどのくらいご存じでしょうか。この名前の羅列を見て、懐かしいなど思われた方もいらっしゃるかもしれません。保守的な固有名の数珠つなぎとして批評史を捉えているというふうに見えるかもしれませんね。たしかにそういう面もあります。

ではお前が考えるその“魂”ってなんなのか。この質問に答えなければならないのですが、あまり直截に訊かれると困ってしまいます。今日はちょっと遠回りしてごまかします。ここから教室で学生に話していることに重なってきます。

## 2. 文芸批評に入門する？

わたしが担当している講座で「文芸批評入門」と銘打ったものがあります。文芸批評に入門するとはどういうことか。なぜ入門すべきなのか。それにどんな価値や意義があるのか。若い人にたいして、まずはこれが非常に伝えづらい。

まず「文芸批評」というものが「入門」を歓迎しているようにはそもそも見えないという事実が躓きます。「文芸批評」の古典的テキストを読んでも、むしろ<一見さんお断り>を掲げているように感じられる。単純に、ハイコンテキストで読むのに時間がかかる——ハイコンテキストは批評の宿命です。何しろ、～～についての批評であるほかないのですから。これはどうにも仕方ありません。やはり学生は「なんでわざわざ…」という感覚を持ってしまいます。そしてなんとなく言葉遣いがキツイ。論争的で怖い。食わず嫌いは避けてほしいですが、怖いという感情を持ってしまうのはしかたない。このあいだの授業で小林秀雄が書いた「モーツァルト」という文章をみんなで読みました。その後何名か学生を当てて、「直観的な言葉で良いから、今読んだ文章をけなしてみて」と求めたところ、一人の学生が「なんかイキってる」と答えてくれて、かえって清々しい気持ちになってしまいました。わたしは小林秀雄愛読者ですが、この意見もよくわかります。

ですが、それだけではなく、現在批評に「入門」することの難しさには、昨今の受け手側の事情、社会の事情がおそらく関係しています。

授業内容にもよりますが、時々、考えながらひたすらゆっくり話し続けるスタイルの授業を

します。パワポを使わず、板書もほとんどしない。ここにはわたしがどうしようもない機械音痴だという事情もかかわっています。このスタイルだと当然、ぐるぐると思考が同じところをめぐって、論旨が停滞するようなことも起こりやすい。先ほど名前を挙げた山城むつみや室井光広の授業でわたしの中に強く残っているのは、そういう時間を共有した記憶です。「考える人間というのはこんな姿をしているのだな」となんとなくですがその凄みに触れた気がして、当時の自分はなぜか満ち足りた心持になったんですね。そこからわたしは批評に関心を持っていきました。今の学生たちにもそういう経験をしてほしいという思いが少しあります。

もちろんそのような授業をつまらないと感じる学生がいてもいい。ある程度は好みの問題からです。教員がたくさん板書して、自分はノートを取る、授業のねらいが明確で、段階的に細分化されていて、後から見返して整理整頓する。復習のしがいがある。そういう授業を好む人がいていい。何が良い悪いという話ではありません。

ただ、ある一年生が春セメを振り返りつつ「この数か月で大学で学んだことが将来何の役に立つのだろうか？」と自問自答していたのには、驚きました。この将来とは、就職活動でということなのか、社会人になってということなのか、あるいはもっと先のことなのか、くわしいことはわかりません。わかりませんが、大学に在籍して半年も経っていない段階でそのようなことを気にしている。

これはたぶん彼特有のことではないし、彼のせいでもない。今の学生たちには、授業で伝達された事柄を「スキル」と捉え、その有用性の如何によって大学で過ごす時間の価値をジャッジする、そういう判断の回路があらかじめ埋め込まれているのではないのでしょうか。わたしの学生時代には、良くも悪くも、役に立たなそうなことに没頭する自分に酔う空気があった気がします。そういうものはあまり感じられません。彼に対して恥ずかしく、申し訳なくなりました。わたしとの時間は端的に「無駄」なのではないか、と。

### 3. 批評と考察

このところ人気の書き手に三宅香帆さんという方がいます。肩書は文芸評論家です。たまに授業で「批評家、評論家で名前を知っている書き手はいますか？」と学生に質問するのですが、ほとんど出てこない中でかろうじて名前が挙がるのが三宅さんです。学生が三宅さんを知るきっかけはたいいてい YouTube 動画です。存在を知った後も、三宅さんが話題の本を紹介したり、本屋をめぐったりする動画を観るけれど、三宅さんの本はたいして読まない。それが現実です。

さて、その三宅さんの最新の本のタイトルは『考察する若者たち』。若者たちはとにかく「考察」が好きだ、それはなぜか。単純に言えばそのようなことが書かれています。

じっさい、春セメに学生に課した期末課題でも「このレポートでは～～を考察します」、あるいは「わたしは～～について考察しました」というふうに書き出す学生が多くてびっくりしました。「～～について批評しました」とは書きません。しかしそもそもわたしの感覚では、考察にせよ、批評にせよ、そんな前置き自体完全に余計なのですが。いわゆる「考察動画」の影響

でその言い方が文章のフォーマットとして定着してしまったのではないのでしょうか。

三宅さんはその本で、現代における「考察」と「批評」の対立をつぎのように説明しています。

「考察」の目的は、作者、制作サイドの意図——彼らが作品中に散りばめたナゾに気づき、解答をうまく言い当てることです。たとえば近ごろのテレビドラマの視聴者は、「考察」ポイントを探しながら視聴し、同時並行的に SNS 上で他人の「考察」に触れ、仕掛けられたナゾと解答をファンダム、いわゆる「界限」で共有するところまで含めて楽しめます。このような流れをうまく作り出した作品が、ヒット作とみなされる。

わたしにとって不思議で興味深いのは、そのナゾが意図的に仕掛けられたものであるかどうかはそれほど追及されない、ということです。よく観察すると、じつはそこはあまり重視されていない。とりあえず「どこかにナゾが隠されている」という前提で視聴され、考察され、答え合わせが行われます。「意図」がなければ答え合わせは無意味です。だから、厳密にはあるのかないのかじつはよくわからないのだけれど、「意図」というものを想定し、それを集団的に消費する。これがコンテンツを享受する、ということなのです。たとえば漫画『ONE PIECE』はいまや、新作がリリースされるや YouTube 上に大量の考察動画がアップされ、考察者が作中の伏線回収をどんなふうに言い当てるかを読者が楽しむ「再帰的」なコンテンツと化しているそうです。

そのような「考察」のありようにたいして、「批評」とはどういうものなのか。三宅さんいわく、<作者も把握していないナゾを解くこと>です。「批評」についての三宅さんの説明は誇張されており、単純化し過ぎですが、とりあえずそういうことにして進みましょう。

たとえば、アニメーション映画『となりのトトロ』について「考察」が——<じつは監督の宮崎駿は『となりのトトロ』に、「サツキとメイはすでに死んでいる」という設定を潜ませているのだ>と述べる。一方「批評」は——<サツキとメイは、戦争によって亡くなった子供のメタファーとして捉えうるのではないかと問いを立てて、そこから作品世界をより深く探索する。

重要なちがいは、「作者の意図」にたいする意識、スタンスだということです。「考察」と「批評」がそこで分岐し、どんどん乖離する。そして現在は「考察」ばかりが好まれる。その背景には<フィクションを楽しむにあたり、解釈を「作者の意図」として受け取ったほうが安心できる人が増えている>という単純な事実がある。三宅さんはそう説明します——解釈＝批評はしょせん個人的なものであり、「正解」がどうかかわからない。それよりも、作者が潜ませた「正解」を知れた方が面白い。「正解」のある考察には労力を払う価値があるが、批評的に作品とかかわる努力は報われない可能性がある。たしかにナゾはナゾのままにとどまる場合がほとんどですから。

これはおそらく若者だけの感覚ではないのでしょうか。そう信じてしまいやすい状況に、わたしたちは置かれているのです。

もうしばらく、三宅さんの本に沿って説明をつづけます。こうした状況の根底には、AI によってわたしたちの欲望がどんどん最大公約数化されていく、という流れがあります。

“おすすめ機能”ってありますよね。これが今あなたに必要なものですよ、と「正解」を教えてください。自分に最適化された欲望を他者が表現してくれるなんてすごいな、と感じます。ただ、その便利さの先には、短期的な報酬刺激を繰り返し与えられ続けることによって欲望が平板化され、短時間化され、集団化され、計算可能なものに均されていく、という事態が待ち受けています。ここから当然、逆の流れが生じます。AIの計算方式を人間の側、コンテンツを制作する側が学習し、繰り返すのです。利益を得るためには、アルゴリズムに拾ってもらい、広く“おすすめ”してもらい必要がある。そのためには「報われポイント」が明確でなければならない。ここに「正解」が存在しますよ、とわかりやすく示す記事や動画や商品の方がクリックされやすいので、そういうものが量産されます。

報酬系をひたすら効率よく刺激してくれるコンテンツを介して、AIと人間が相互補完的に協力し、共進化し、共依存しながら、欲望の共同体を作り上げている。その極北が、ほぼ無意味であるにもかかわらず見るのをやめられないTIKTOKのショート動画です。

このような状況と、みんなで制作者の意図を忖度し、「正解」を言い当てることに快感を覚える“考察文化”の隆盛とのあいだには結びつきがあるはずですが。存在するかどうかわからない「意図」を想定し、それを言い当てようとする。この「正解」を求める集団的な熱狂は、AIに欲望を決定されるわたしたちのいびつな鏡像なのではないでしょうか。つまりこういうことです。考察において、なんらかの「意図」が存在するとみなされているけれども、だからといってそれは、作品や作者に自律性や主体性を認めているわけではありません。芸術における真の自律性・主体性とは、作者自身、作品自身、自らの欲望が不明であるということ、「正解」がわからないまま表現の欲望に突き動かされて創作を行ってしまうということです。そうしていったん作品が完成したからといって、「正解」が明らかになるわけではありません。ある面では、自らの欲望の不明瞭さは表現される以前より高まるとさえ言えます。言い換えれば、ナゾの強度が高まる。だからこそ次の創作に向かわざるをえなくなるのです。そうして、作品を受け取るとは、作品をとおして、自らの不明瞭な欲望と、あるいは魂と、向き合うことなのではないでしょうか。

「正解」の存在があらかじめを想定されている考察において、こうした面倒くさい事柄——そこにこそ作品の単独性、固有性が宿るのですが——は無化されてしまいます。したがって、「考察」と聞くと何か人間的な行為であるかのように思われますが、それは違うのです。繰り返しますが、わたしたちの欲望はすでに、アルゴリズムによって日夜を問わず浴びせかけられる報酬刺激によって緻密に組織されています。考察という集団的な営みは、それを稚拙に反復しているだけなのではないか。わたしたちは最大公約数化され均されていく自分たちの欲望を再確認し、相互に承認し合うことで、自らをAI的な何かにより似せたい、同化したいと望んでいるのかもしれない。そう思います。

#### 4. 文芸批評の魂

ここから逆に、“批評”が置かれている苦境の意味や批評の役割が、さらにおおげさに言え

ば文芸批評の〈魂〉が見えてくるかもしれません。

文芸批評のルーツに、欧米の文芸理論の紹介という面がありました。明治時代の坪内逍遙の仕事の思い浮かべていただけるとわかりやすいですが、西洋から入ってきたこの「小説」っていったい何なのか、という話から始めなければならなかったのですね。加えて、良書を紹介するブックガイドの面がありました。今読むべき本をわかりやすく幅広く伝えるのがブックガイドの役割です。この意味で、文芸批評と「正解」がはじめから無関係だったかと言うと全然そうじゃないのですね。

批評から「正解」を引き離そうとして苦闘したのが、小林秀雄という批評家だったのだと思います。

〈歴史は繰り返す〉の典型例だと思いますが、文芸の世界ではたびたび「批評家無用論」が噴出します。かなりざっくり言うと、小説についての「正解」は小説家に聞くべきだ、わざわざ部外者である批評家が作品を評価する筋合いはないのではないか、ということです。これにたいする小林秀雄の反応を、これもざっくり要約すれば、作品っていうのは読まれることにおいてその都度存在するものじゃないか、作品はそれを読む〈私〉との一対一の関係の中にあらわれ出るものなのだ、ということです。

そこに当然、「それなら批評ってあなたの感想でしかないよね」というツッコミが入ります。だから、ここから小林は、ある本を読み、そこに刻まれた言葉を受け取り、何かを感じ、考え、そして自らの言葉を語り出してしまう……この読み—書きのサイクルにどんな意味や価値があるのだらうと考えました。作品と受け手の欲望の関係性について、両者の〈魂〉の交響という問題を、はじめて自覚的に取り上げたのです。そして、その響き合いの内部に感触される不思議なく私〉を見据え、考え抜こうとしました。

これが、小林秀雄が日本近代批評の創始者とと言われるゆえんなのですが、そんなく私〉とはどのような存在なのか。

大正時代であれば、教養があり、人格者でもあるような人間の感想には価値があるんだと言ってしまうえました。しかし昭和になると、そんなふうになイーブに教養や人格を信頼できなくなっていました。

ではどうするか。しょせんは本を読んだ一個人の感想に過ぎないという事実は、あくまでも手放さない。しかし、それにもかかわらず作品を熟読するうちに、理論的な強度を備えたく私〉が立ち上がってくる、というイメージです。偶然的に読み手であり、かつ必然的に書き手であるような、そういうく私〉をとらえようとしたのです。発明しようとした、とすべきかもしれません。エッセイと哲学の間をジグザグに縫って進むく私〉、と表現してもいいかもしれません。

ここで重要なのは、当然そのようなく私〉は文章の中にしか存在しなかったことです。わたしがつねづね面白いと感じるのが、商業デビュー作に小林秀雄が書きつけた、つぎのような文章です。意味は取りにくいと思いますが、私、という言葉に注意して聞いていただければと思います。読み上げますね。

「かうして私は、私の解析の眩暈の末、傑作の豊富性の底を流れる、作者の宿命の主調低音

をきくのである。この時私の騒然たる夢はやみ、私の心が私の言葉を語り始める、この時私は私の批評の可能を悟るのである」（「様々なる意匠」）。

非常な悪文です。学生はやはり「なんかイキってる」と感じるかもしれません。それでもこれは、作品を読むことによって立ちあらわれる〈私〉、作者の単独的な欲望と向き合うことをとおして個としての自分にとって切実な「ナゾ」と向き合おうとする〈私〉、そういう〈私〉の姿が刻まれた記念碑的な悪文だと思います。

文芸批評のはじまりに位置するこの出来事は、現在もまったく意義を失っていないと思います。小林秀雄の悪文と、AI がはじきだす「正解」としての文章との違いに意を用い、心を砕くことが、これからどんどん大事になってくる気がします。

時間の都合とわたしの力不足でしり切れトンボになりましたが、これで終わります。